

体育の目的と目標

会長 伊藤 章

今年度、本学会の学会大会（第 53 回）は大阪産業大学で開催される。2008 年に同大学の人間環境学部にスポーツ健康学科が設立されたが、初めて学会大会の開催をお願いした。引き受けて頂くには色々ご苦労されたと思うが、齋藤好史先生を中心に現在着々と準備が進んでいるという報告をうけている。

さて、第 51 回と 52 回の学会大会では本部企画として学校体育をテーマに講演などを実施してきた。私は学校体育が体育学会のメインテーマであると考えている。若いころは、体育の授業でどのように走らせようか、どのようにして動きを教えようかについてばかり考えていた。しかし、今は「体育は何のために存在し、授業では何を生徒に教授すべきか」先人たちにはすでに議論されてきたことであるが、もう一度考えようとしている。つまり、体育の本質的なめあて（目的・目標）を私なりに整理したいのである。

広辞苑によると、「目的とは成し遂げようと目指す事柄。めあて。行為の目標として行為を規定し、方向づけるもの」、そして「目標とは目じるし、めあて」としている。大辞泉では「目的は目標に比べ抽象的で長期にわたるめあてであり、内容に重点を置いて使う」と説明している。

文部科学省によると体育の目的は、すべての子どもたちが、生涯にわたって運動やスポーツに親しむのに必要な素養と健康・安全に生きていくのに必要な身体能力、知識などを身に付けること」としている。つまり、豊かで安全な生活ができる運動能力と知識の教授が体育の目的だということだ。体育授業の手段としてスポーツを利用するところは許されるだろう。しかし、スポーツ競技力を競うクラブ活動とは一線を画す必要がある。例えば、走るスピードを利用して高く跳ぶ能力を身に付けさせることを目標とした授業について考えてみよう。マットがある学校では、背中から落ちる背面跳びを指導することがふつうであるが、これはクラブ活動の走り高跳び競技を指導しているのである。生徒の生活では背中から落ちる跳び方は役に立たない。足から安全におりる跳び方の指導が優先されるべきである。

目的をしっかりと把握・理解することは進むべき方向を間違いにないものにする。常に本質的な目的にむかって進むために、目的にかなった目標をしっかりと定めて指導することが重要だと思っている。